パラダイス・ロスト

聖夜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パラダイス・ロスト

【Ｎコード】
Ｎ３１３６Ｙ

【作者名】
聖夜竜

【あらすじ】
様々な世界の者達が絶海の無人島に招かれる。しかしそこは、結界によって現実から隔離された閉鎖空間だった。封印された力、次々と発見される不可解な謎、そして仲間内での対立――。次から次へと事件が起こるこの島で、集まった２５人の少年少女は『楽園』と呼ばれる孤島に隠された謎を解く為に奔走する。その中で明らかになっていく事の真相、徐々に崩壊を始める孤島。彼らは無事に無人島サバイバルを乗り越え、元の世界へ帰れるのか――！？

プロローグ～辿り着いた先～（前書き）

今回は多作品によるクロスオーバー二次小説です。

見切り発車なので今後どうなるかは作者にも分かりませんが、暇潰し程度に見てくれると幸いです。

プロローグ～辿り着いた先～

あらかじめ言っておく。

いつも通り手早くメシを済ませ、外へ出た。

山風に凍り付くような１２月１８日。

今日も順調に寒い。

そしてこの日を境に俺の生活は一変する事になる。

それは俺にはちっとも笑えない事だった訳で。

「くそっ……何だ？　暑い……まるで夏だ」

あまりの暑さで目が覚めた時、キョンは何処かの海岸に倒れていた。

真夏の太陽がサンサンと降り注ぐ中、北高の冬用制服の上にコートという、まるで我慢大会にでも参加しに来たのかと思うほど、あまりに場違いなキョン。

汗だくになったキョンはとりあえずコートを脱ぎ捨てると、海岸一帯を見渡してみる。

「……無人島、か？」

奇妙なことに、キョンのいる島は夏休みにＳＯＳ団で行った絶海の孤島に似ていた。

「……ッ！？　ハルヒ！！」

とその時、同じく北高の冬用制服を着た少女、涼宮ハルヒが砂浜に倒れているのを発見した。

「つまりあたし達は、クリスマスの一週間前から夏休みに時間が戻っちゃったって訳？」

「いや、俺にも何が何だか……」

バツが悪そうに答えつつ、内心考えてみる。

（もしそうだとすれば長門の仕業か……？　いや、長門はこんなやり方はしない）

キョンが色々と思考を巡らせている間、ハルヒは無人島をキョロキョロと興味深けに見渡していた。

（って事は、またハルヒの仕業か……）

また厄介な事に巻き込まれたなと思いつつ、キョンはトボトボとした足取りでハルヒの傍に歩みながら溜息を漏らす。

「キョン。とりあえず、あの森の奥に行くわよ。館があるかもしれないわ」

ハルヒの指差した先には薄暗い森が続いており、まるでキョンとハルヒの来訪を歓迎しているかのようだ。

「館？　おいおいハルヒ。さすがにこの島に館はないだろ。どう見てもただの無人島だ」

「いいえ、きっとあるわ！　さっきからそんな気がするのよ！」

（……どういうことだ？）

元気よく進み出すハルヒの後を慌てて追い掛けつつ、キョンはふと疑問に思った。

その頃、キョンとハルヒが倒れていた海岸から少し離れた場所に位置する岩場では、同じように無人島にやって来た二人がいた。

波の音が聞こえる……

「どこよ、ここ……」

青髪の可愛らしい女の子、古手梨花は目の前に広がる海を眺め、ポツリ呟いた。

「参ったわね……こんなイレギュラー、百年の中で初めて見たわ」

目に映る景色は生まれ住んでいた雛見沢ではない。

それどころか、ここが日本なのかも疑いたくなる。

確かに、梨花が変わり映えのしない日常に飽きていたのは否定できない事実。

だからといって、これは非日常どころの話じゃない。

まさか、サイコロを何度も振る権利すらも奪われてしまうとは思ってもみなかったのだ。

運命のサイコロを振り、そのまま勢いのあまり遥か彼方へと飛んでいってしまったかのような悪夢。

何よりも不安なのは、目に映る景色が雛見沢ではない事。

知らない場所で目覚めた事が、梨花の不安を増長させていた。

何しろ、こんな事は今までの人生で一度も無かった。

とにかく、まずは羽入を呼び出すのが先決だ。

「羽入！　どこにいるの？　聞こえてる！？　羽入っ！！」

その場に立ち尽くしながら周囲を見渡す。

梨花は必死に呼び掛けるが、羽入からの返事はない。

それどころか、羽入の気配すらも感じない。

「そんな……」

梨花はその場に崩れ落ちる。

こうして、古手梨花の物語は絶望から始まった。

ユニオン軍ＭＳＷＡＤ（エムスワッド）所属のエースパイロットにして優秀なフラッグファイターであるグラハム・エーカー。

彼は何故か直前までに着ていたパイロットスーツではなく、黒い私服という出で立ちで海岸沿いの岩場の上に立って海を眺めていた。

その瞳の奥底には、今までの戦いの記憶が鮮明に刻まれている。

二人の亡き同胞との約束を胸に誓い、親友のビリー・カタギリがグラハムの我が侭を聞いて短時間で作り上げてくれたＭＳ『ユニオン

フラッグカスタム』を駆り、ソレスタルビーイングの刹那・F・セイエイが駆る『ガンダムエクシア』との激しい戦いの果てに相討ちとなった。

相討ちという形になってしまったが、グラハムは満足感に満ち足りていた。

ようやく、あのガンダムを打ち倒す事が出来た。

ハワードとダリル、そしてエイフマン教授の仇を討ったのだ。

せっかくのフラッグカスタムを壊してしまい、カタギリには悪い事をしたと思っている。

もしもまたカタギリと会えるのならば、その時に謝ろう……

……そこまで考え、グラハムの意識は途絶えた。

次にグラハムが目覚めた時、そこは死後の世界とは明らかに違う、見知らぬ無人島だった。

――そして、現在に至る。

グラハムはまだこの状況に慣れてはいなかったが、とりあえず海を眺めて落ち着く事はできた。

そして次にどうするか考えていると、ふと人の気配を感じ取る。

「……そこに隠れているのは誰かな？　出て来たまえ」

グラハムが岩に向かってそう告げると、青髪の女の子がゆっくりと姿を見せた。

「君は……？」

「……古手梨花なのです。あなたは誰なのですか？」

「失礼。私はグラハム・エーカー。軍服は着ていないが、軍人だ」

こうして、梨花とグラハムは無人島にて出会った。

「……なるほど。君も気付いたらこの無人島にいたという訳か」

「みぃ……起きたら知らない場所にいたので、ビックリなのですよ」

梨花から詳しい話を聞き、情報を頭の中で整理するグラハム。

その隣では、梨花が難しい表情で思考を巡らせていた。

（知らない……私はこんな男、知らない……！！）

自分の全く知らない人物。

梨花にとってグラハムという存在は、ある意味で圭一以上のイレギュラーだ。

果たして、今までにないこのイレギュラーな世界で梨花は生き残れるのか？

それは、『運命』のみが知っている――

プロローグ～辿り着いた先～（後書き）

とりあえず、プロローグ。

実はこの小説、作者の好きなキャラたちがこんな風に会話をしたら……

という、下らないコンセプトで出来ています。

なのでストーリーはあくまで二の次だったり……（えっ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3136y/

パラダイス・ロスト

2011年11月7日11時11分発行